

一生成香 「島津久厚元米山理事長のご逝去を悼みて」

研修リーダー 菊地 平

巨星逝く 2001年～2007年の間（財）ロータリー米山記念奨学会理事長をされた我らが敬愛して止まない島津久厚P Gがご逝去されました。心からのご冥福を祈り、万感の思いを込めて一筆申しあげます。

2004年6月米山奨学会理事・評議員80名が島津理事長の元に集い会議をいたしました。一連の審議が終り、自由討議になった時、評議員が発言を求めました。「我々は米山奨学生を支援してきて50年、世界の101カ国に13,000人の学生にロータリーの理想を灯してきました。そして米山の理想とする、国際理解と相互理解の努力を続け世界平和の創造と維持に貢献して来ました。

今年も中国の学生400人に奨学金を出しています。それなのに今年の中国と日本のサッカー試合を見てください。皆さんTVを通して見られたように、選手も サポーターも身の危険を感じるような場面が度々あったのはご存知の事実であります。この若者と同類の青年とは違うけれども、中国学生に対する支援枠を見直してはいかがでしょうか？」期せずして3人の評議員から次々に賛成意見の発表がなされました。なかには「国に帰って日本の文化を紹介するどころか、他国に就職して行くのが多いではないか」また「国に帰った学生は日本の事を良く言うと出世に影響するから、話さない、というではないか」と。別の人は「面接の時手加減をして、採用を控えたらよい」など、会場全体に動揺が走り、「そうだ」「そうだ」とのヤジもでました。

皆が動揺する中5人目の評議員からこのような発言がありました。「皆さんの意見は至極もったもであります。しかし我々が米山梅吉は、どんな思いで自分のお金を誰にも判らないようにして、何年も奨学生を支援してきたのでしょうか？陰徳を積むという、その崇高な信念に動かされて、米山奨学会を作り、会員から年間16億円もの浄財が集まって、今の米山奨学会があることはご承知の通りです。奨学生が卒業して何処の国に行こうと、どんな生き方をしようと、我々がお金で、人の心や、その人の人生を縛ってもよいのでしょうか？」「奉仕して奉仕して奉仕尽くして、見返りを求めない、それがロータリーの心ではないのでしょうか？」会場は一瞬静まり返り、やがて大拍手が起こりました。

そして今までの通りのプログラムとなりました。閉会にあたり島津理事長は「米山奨学会の理事役員のみなさんこそ「寛容」の人でありました。」とご挨拶されたのでした。

当時、菊地はガバナーエレクトとしてご指導をいただきました。

地区諮問委員会でも、島津先生は委員長を長くお勤めになり終始温和な風格で、何処でも、どんな場でも、正に殿様でありました。

1971年から3年間神戸ロータリーの米山奨学生だった台湾の阮允恭（げん いんきょう）さんが、26年経って台湾に「中華民國扶輪米山会」を立ち上げられたのです。その阮さんが台湾米山会理事長として2009年9月12日に島津先生を自宅に訪問され、2度目は昨年2013年5月10日ご夫妻で訪問されました。2度とも菊地がご縁あって、空港から終日都城RCの方とお供をしましたが、見事な印刷の訪問記が出来上がってまして、その一部を紹介いたします。

島津理事長にお会いできる！これだけで私の思いは100%叶っているのですが、皆様のお陰で都城市内を車で周り、歩き、その地に暮らす方々の話をお聞きすることができました。そうした触れ合いによって「地元の方が、故郷と島津家を愛し誇りとされている」と言うことを肌で感じました。

その所以は、やはり島津様のお人柄でしょう。時代は変わったけれど、たしかに、「人望厚いお殿様」が私の目の前におられる思いでした。

-----対談-----

阮允恭 = この度は、旭日重光章受賞おめでとうでございます。栄誉ある勲章を受章され、私もとても嬉しいです。変わりなくお元気でいらっしゃいますが、何か秘訣があるのですか？

島津久厚=いやいや、ありがとう。実は毎朝、木刀での100回素振りを欠かしませんでした。これは若い頃からの習慣になっているので、お陰で元気でおります。

阮允恭 =台湾学友会は、日本で地震災害にあった地域にガバナー事務所を通して義援金を送りました。ご恩返しなのです。

島津久厚=ロータリークラブではなくて、台湾学友会が義援金を日本に送ってくださったんですね。そりゃスゴイ。

島津久厚=私が理事長時代に聞いていた台湾学友会独自の奨学金設立の事はどうなりましたか？たしか台湾に留学を希望する日本人学生を対象に奨学金制度を立ち上げたい、ということだったですね。

阮允恭 =はい、2009年から第1号の奨学生を迎えました。ロータリアンの皆様がしてくださったことと同じことをしてみると、大変さと有難さが更に判ります。これもご恩返しなのです。

阮さんは島津先生が東京に居られる時は何度もお会いされていて、都城に帰られてからは、お二人とも、この2度の訪問を大変に喜ばれていました。

また、昨年面談では、島津先生は歩行が少しご不自由でしたが、「阮さんが見える」と、楽しみに、朝早くからネクタイをされて、そわそわ待っておられたと、元気だった奥様の話でした。

阮さんは「米山は花火の様では無く、さざ波のように伝わっていく、感謝とご恩返しの気持ちを島津先生にお伝えにきました」と、固い握手と涙の場面に時を忘れるほどでした。

8月7日正午、その阮さんから電話がありました。島津先生の訃報を聞かれてのことでありました。

阮さんは「私は米山奨学会に出会わなければ、今日の私はありません。また、島津先生にご指導いただいたから、台湾米山奨学会も出来たのです、心からご冥福をお祈りします」と。阮さんは長野県の通信機メーカーの台湾代理店として成功、今在ることの感謝を何度も口にされていました。

島津PGの温容は、知る限りの人々の臉に、とこしえに残ることでしょう。

殿様として天に座し、ゆっくり見守りください。厚い恩顧を被った一人として、ここに一文を捧げます。